明治二十年九月廿五日刊行

毎月一回發行
壹冊正價廿錢
全國無郵送稅

通信女學 講義錄

第五卷

女學雜誌社

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

〇通信女學發行の主旨

女學雜誌社　巖本善治

當今女子敎育の說、甚だ隆んとなりて、各地の女學校は、日に日に其數を加へ、此に就て學文する女子も、亦た月々に多くなれり、此模樣にては、今四五年の内には、女學の進步非常にて、おさおさ男子にも劣らざる有爲の女流を、多く出さんは勿論、婦人一汎の有樣必ず一變して、今の如き交際にては、事足らざるに至るべし、故に、今日に於て、尙ほ學文せざる貴孃方は、一日も早く學校に入りて、一と通りの修學を爲し、決して時勢に後れざる樣に勉めらるべし、之れ甚だ大切の事なり、然るに、既に一家の妻となりて、家事向万端を取扱はるゝ方々は、固より學校へ通はるべき餘暇もなく、又ゆる〳〵と讀書さるべき便利も小かるべければ、此樣の人々が、別に學文さるゝ方法なかるべからず、抑も、一家を脩るには、家内衞生家内經濟の事を初として、母親たるの覺悟、育兒の心得などは、是非とも學び置かでは相成らず、特に又追々開化して、交際の有樣も變化する今日に當りては、文學理學の一班より、歷史地理の大略、及び、西洋女禮式の一と通りを承知せざれば、大なる辱を受るともあらん、故に、此度かゝる妻君母親たちの都合を計りて、通信女學と申す仕組を設け、家内に居ながら、少々宛の餘暇を窺みて、學文さるゝやうの方法を備へ、二三年にて耻かしからぬ程の學力を得さするやう、敎授すべし。

略則

通信女學は、月々中本六十頁以上の講義錄一冊を出版す。右講義錄には、女子生理、育兒心得、家内經濟、女藝案内、萬國史略、文學一班、理學一班、家内理學、西洋女禮等の諸科を講述し、且つ、其問答叢話の一欄を置て、右講述の上に付き、質疑を寄せたる人々に應答し、又婦女學文の心得、其外、諸般の有益ある事件をも、書載すべし、尤も右諸科講述の終るを待ち、漸次に、尙更に高尙なる學課を敎授す。右講義錄の讀者は、文意事理等に關して、質問を寄するを得、郵劵封入の上、右質問を送る時は、可成速に應答し、尙ほ人に示して益ある分は、問答欄内に收む。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

語格ハ上古より一定して變らず

語格に明かならざれバ其筆する所おのが意に反す

○文學一斑（第五回）

語格

語格とハ諸種の言語の格式をいふ。語格ハ誰ありて作りさだめたるものならねど靈幸ふ神代の昔しより自から其法さだまりて變らず。言語に古今の違ひあり文章に巧拙の別ハあれども語格のみハ然ることなし。人もし語格に暗からバ物かきても意を盡すこと能はず意を盡すこと能はざれバ志を達することを得じ。己ハ自言を用ゐんとして其語ハ他言となり己ハ將然の事をいはんとして其述るところハ既然にわたり甚だしきハ我ひとり誇面なるも其筆しゝことの何の意なりや人に了解がたきさ

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

文ハ達意を貴ぶ文の意を達せんとならバ語格に通ぜざる可らず

古書ハ語格に従ひて解明するを得べし

へありぬべし。茲にいたりてハ何でか文章の巧拙を論らふの暇あらん。文ハ意を達するが第一の要にして巧拙のことハ第二なり然バ巧拙よりも先づ意を達することを勤めざる可らず意を達せんとおもはゞ語格をあきらむるより他に途なかるべし。語格をくはしく知ることハ已が文かくときの要のみならず古き書など讀んにも便となることぞ多かる。古書の暁りがたきふしも語格のすぢにしたがひて推究めなバ大概をしらるゝぞかし偖こゝに語格といへるハ體言、用言、助詞などにハ限らず伸語、約語、轉語、畧語および假名遣にいたるまで凡そ言語につきての格式ハ皆こめたるなり。然バ言語に係る初學

二

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

五十音の事

語學には先づ五十音を詳かにするを要す

の心得べき事どもハ逐次にこゝの條にかゝぐべし

五十音　言語の數ハおびたゞしく其變化きはまりなしと雖どもこの五十の音のほかにいでず悉とく此中にありて千變萬化するなり。この故に言語の學せんにハ先五十音を竪に横に讀そらんじ且あ行や行わ行なるい。ゐ。え。延。ゑ。お。を。等の區別をも辨へ知るを要す

喉音　あいうえお……アイウエオ……阿行

牙音　かきくけこ……カキクケコ……加行

齶音　さしすせそ……サシスセソ……佐行

舌音　たちつてと……タチツテト……多行

舌音　なにぬねの……ナニヌネノ……奈行

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

四

五十音の歌

唇音　はひふへほ。……ハヒフヘホ……波行
唇音　まみむめも。……マミムメモ……麻行
喉音　やいゆえよ。……ヤイユエヨ……也行
舌音　らりるれろ。……ラリルレロ……良行
喉音　わゐうゑを。……ワヰウヱヲ……和行

五音十行の歌あり云く「あまや喉、か牙、さ齶、たな舌、は輕、ま重く唇るの音」

同音相通

五十音の竪を音とし横を韻とす。同音相通とて同じ行の音ハ相通じて轉ることとあり。をさぎ(兎)をうさぎ行わともいひ。いめ(夢)をゆめ行やともいひ。ずゞろ(漫)をそゞろ行さともいふ類これなり。

同韻相通

又同韻相通とて同じ横の韻なるが轉るあ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

音便のこと

あ韻語尾にあるときハ語頭のあ音を略す

りむ。ま(馬)をう。ま三段へび。(蛇)をへみ。二段あやしぶ。(怪)をあやしむ。三段といふ類これなり。この他に音便とてき。をい。とおしく。をう。とおしふ。をもう。に變たるが中古こなたのものに多く見ゆツ。キ。ヂ(築地 土にて築ける垣なり)といふべきを「つい。ぢ」といひカキ。マミ(垣間見 垣の間より見ること也)といふべきを「かいまみ」といひカラク。シテ(辛 やう／＼のことにてといふ意)といふべきを「からう。じて」といひトカク。(此彼)といふべきを「とかう。」といひホフ。シ(法師)といふべきを「ほう。し」といへるなども皆よこなる同韻なり

第一段のか。さ。た。な。は。ま。や。ら。わ。の下にあ。の音あるときは畧きていはず縦バ高天原を「たかまのはら」(正しくいはゞタカアマノハラ也)磐余を「いはれ」(大和國の地名なり文字のまゝに讀まバイハアレといふべき也)といふが如し。そハ第一

一段の韻音相合ふときハ多くハ約語となる

段よハ皆か°の響あれバ自から畧かるゝなり。たろのか°いはのぱ何れも口に呼バかァはァとあ°の音そひきたるが故なり

あ°い°う°え°お°の韻の下につく語とか°い°う°え°お°の音の上につく語と合ときハ約語となるが多し。古事記に國中をクヌチとよみ万葉集に吉野爾在をヨシノナルと讀る類なり。く°に°う°ちのに°う°を約れバぬ°となり。よしのに°あ°るのに°あ°を約れバな°となるなり。但しに°をよべバにィとひゞきてい°のこゑ語尾にあれバなり(言語ハ伸もし約もして用ゐれど皆さだまりたる法あり伸語、約語のことをいふべき際に委しく其法をも説示すべし) 六

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

五十音の中活用せぬもの數十三あり

あいお等の右傍に●を附したるハみな活用ざる字のまるしなり他はことごとく活用して言語を千變万化せしむるなり（五十音の中に活用せぬ字は十三にして活用する字は三十七なり）

言詞の別

言詞　聲成文謂之音音發爲言言之成文爲詞とものに見えたるが如く聲の文なして口をいで物の名ことば狀況ゑが思念をあらそれをを言といひ言にそひて助をなすを詞といふ。

こともことばも同うして區別あるにあらず言と詞とを別つため假に斯くものせし也

上古は言も單くその數も甚すくなかりしがこの詞の助によりて自から長くもなり多くもなりしと知るゝなり（ひハもと靈妙の意義あれば最初は日、火、靈など單に用ひけんを詞をそえて光、聖、人、閃く等の語をい

上古ハ言語單にして次第に複雜

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

を加へ其數も亦多かり

言語大別すれば躰用助の三に分る

躰言

有形躰言

無形躰言

用言より成れる躰言

代名躰言

だし丶類をいふ）さて今はその言詞の數いひも知れぬはど多かれど其種類を別はたゞ體言、用言、助詞の三のはかには出ざるなり

體言　有形と無形との別あり。有形の體言とハ天、地、日、月、鳥、獸、虫、魚、草、木などのごとき形あるものをいひ。無形の體言とは上、下。縱、横、東、西、南、北、旅、夢、行爲、などのごとき形なきものをいふ。また用言より成れる體言あり。霞（カスマン、カスミ、カスム、カスメ丶と麻行四段に活らく言なるを二段にてカスミといひ置て天象の一物の名とす）渡（ワタラン、ワタリ、ワタル、ワタレ、と羅行四段に活らく言なるを二段にてワタリといひ置て津渡の名とせり）老（オイン、オイ、オユ、オユレ、と也行中二段に活らく言なるを二段にてオイといひ置て人の年すゝみたることの名とせり）等の類これなり。この他に我、彼、汝、誰、其、此、などの如き事の名にかへ物の名にかへて用ゐる稱へまた一、二、三などのごと

八

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

き數名これらも體言に属り

用言

用言　一言に一つの作用をそなへ語尾の轉じて將然(此より然ならんとすること)連用(活らき言より活らき言につゞくをいふ思ひこがるゝ、老いゆく、などのごとし)連體(活らき言より躰言につゞくをいふ、住むいへ、撃つつづみなどのごとす)既然(すでに然なれるをいふ)等の意をあらはし或ハ希求となり使令となるなど万種の活用をなすを用言とハいへるなり。

用言の作用格十四種

用言のはたらきの數十四格あり。四段の格、一段の格、中二段の格、下二段の格、加行變格、佐行變格、奈行變格、良行四段一格、四段五音より轉る格、くしきしくしゝき二音より轉る格、くしき格、しくしゝき格、くしき一格、しくしき一格、これなり、此中くしき格以下の四格ハ之を形狀言といひて美くし深し戀しなどの如くものゝ形狀をし

作用言十格形狀言四格

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

めすなり。しくしゝき一格以上の十格を作用言とぞよぶ。

四段格の解

さて此に四段といふハ五十音の竪の行かきくけ、さしすせ、等のごとく活らく格なるが故の稱なり（咲かん、さき、さく、さけ○押さん、おし、おす、おせ、などのごとし）

一段格の解

一段といふハ第五音の中きにひみいゐの一音のみ活らく格なるが故なり（着ん、き、きる、きれ○見ん、み、みる、みれ、などの如く第二音一段のほか活らくことなし）

中二段格の解

中二段とハ第五音の中間なるきくちつひふ等の二段はたらきを作すが故の稱なり（起きん、おき、おく、おくれ○落ちん、おつ、おつる、おつれ、戀ひん、こひ、こふ、こふる、こふれ、などのごとし）

下二段格の解

下二段とハ第五音の下の段なるえうけくせす等の二段はたらくに因てなり（得ん、う、うる、うれ○受けん、うく、うくる、うくれ○痩せん、やす、やする、やすれ等のことし）この他の格もこれに准らへて大略ハ知るべし。なほ詳細ハ後に格ごとの言の作用をのぶる條々に示さん

一〇

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

助詞

助詞の種類凡そ四つあり

てにをは

接續詞

助詞

體言、用言をたすけてその趣意をつまびらかにし又ハその言語を剛くし柔らくし或ハ言外の餘情をあらハす等の要あれバ助詞といふなり。助詞の種類を別てバ「テニヲハ」接續詞、副詞、詠歎詞の四となる。テニヲハとハ言語の下にありて助けをなすものにて多くは用言を承く（飽ず。思む。散なむ、往ば。思ひけり見べし老るかなどのず。む。なむばけりべしかな等の類）接續詞とハ前にいひたる言につゞけて亦ことバをいひいづるときに用ゐるものなり（前にいひたる言語の末にそふるを。て。と。に。等ハ接續のテニヲハといひて別なり此の接續詞は將、或ハ、又、偖、抑、などの如く後にいひいづる言語の上におきて前の言

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

副詞

詠嘆詞

語と接續せしむる詞をいふ)副詞とハ或る言詞にそへてその狀情を一層くハしく示すものなり(いよ〳〵、しバし〳〵、なほ、いたく、必ず、うべ、實に等の類の詞をいふ)詠歎詞とハ物にふれ事にわたりて心に感ずるとき自然いひいでらるゝ詞をいふ(あな、あはれ、かな、も、か等の類なり)

●正誤

第四號二頁六行いんハいへノ誤

同　四頁七行並ニ十一行消息ノ傍訓せうそくハせうそこノ誤

同　五頁二行並ニ五行消息ノ傍訓おとづれハせうそこノ誤

同　六頁四行をくりハおくりノ誤

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

乳を飲ませがたき母親の事

〇育兒心得 （第五回）

問。母親によりては、兒に乳を飲まするときは、大に疲勞すと申し、最初より、牛乳などにて育て、頓と自分の乳を與へざるものも、有之やと存じ候、一躰、介弱き母親には、之も止を得ざることに候や。

答。別段、止を得ざる事には無之、成るべく、自ら飲まするようにさるゝが、兒の爲ハ言ふに及ばず、其母親の爲にも宜しく候蓋ハ、若し其兒に乳を飲ますときハ、自然自分の體内の消化熾んとなり、器關の働き活潑となるより、母親ハ、ヒステリック（癪の病の類）の起るともなく、後ち再び懷姙するときに、墜胎の患少く候、凡そ子供を産する程の力

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

然し到底飲ませがたき折の事

ありたるものが、乳を飲ますに弱ハり果つると申すハ、眞に聞へがたきとに候。

問。但し如何にしても、自から乳を飲ませがたきもの有之候半か、そのようの節ハ、何如いたすべきものにや。

答。斯るときは、即はち、乳母を雇ハるべし、乳母が間に合ハぬ時ハ、止を得ず、動物の乳を用ゆるとに候が、此の乳の中には、驢馬のを最良とし、山羊のを次とし、此等が得られざるとき、彼の牛乳、又は、前に述べたるいろ〳〵の製造食品を用ゆるを、順序といたし候。

牛乳の瓶を温むる事

問。扨て、牛乳の類を與ふるとき、之を温むるものに候が、之には、何か心得べき事有之候や。

一四

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

答。左様、通常は、之を瓶に入れ、其儘直ちに温むるものもあれども、之は宜しからず、矢張り、湯を沸かし、其中へ彼の瓶を入れて、温むるが、安全の致し方と考へ候。

牛乳に混ずる湯の事

問。牛乳に混ずる湯の割合は、何如ほどに致すべきや、伺いたく候。

答。最初は、湯を多くして、差支へなく候へども、赤子が追々と生長するに随ひ、牛乳の量を多くして、湯を減じ、終には、湯を三分一、牛乳を三分の二ほどに致すものなり、但し、斯く牛乳ばかりを與へて、赤子を育つるときは、此の乳を飲ますると一處に、亦た多少の水を用ゆるが宜しく候。

乳を温むる温度の事

問。乳を温むるにも何如ほど之を熱くして宜しきもの

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

尙ほ殘せし條々の事

にや、承知いたし度候。

答。之は、勿論母親の乳と同じほどの温度あるべきもの、につき、即ち、華氏の寒暖計にて、九十度位なるを適當といたすものに候。

問。赤子の食物につきては、畧ぼ承はるべきを伺ひたる心地せり、何か殘しこと御座候はゞ、承知いたしたく、且つ、次には、何を伺ひ申すべきや、御指圖願ひたく候。

答。左様にて候、先づ、畧ぼ大抵は申上たるよう考へ候が、くれ〴〵も御注意ありたきは、赤子に餘り多く食物を與へられまじきとなり、先づ、母方が、自身にも乳を飲ませらるゝにしても、前申す如く、牛乳の類を御用ひあるにして

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

も始終時刻を定め、用量を限り、決して勝手に多く食べさせぬよう、成さるが肝腎と存じ候、惣じて、母親方は、赤子が何か事に驚きて泣くとも、又は、何か痛む所ろありて泣くとも、常も之に乳を含まするものあるが、至つて悪しきと思へる、既に成人したるものにても、三度の食事の外かよ、不規則なる食べ方を致さば、必定胃病を起して病となるべし況して、身躰八膚悉く軟らかなる赤子に取てハ、其害さらに恐ろしきものと知らるべし、故に、泣くときも、笑ふときも、其の何の故にて泣き笑ひするやを辨ずると、必要なれども、之は、未だ言葉を出さぬものに對しては、知り得がたき儀ゆへ、扨ては、初めより、食量と時刻とを定め

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

乳母を撰むに注意すべき事

置き、其外は一切與へざる規則となすべし、而るに、尚は泣くとも、之は決して食物を與ふる時にあらずと覺悟し、何か外の元因あるかと思ひて、注意するが宜しからんと思はる此の一事、母親がたが、尤も注意ありたきと申すなり。以上いろ／＼お話しを致したれば、之れよりは、乳母の事を談じ候ては何如、段々に御問ひ被下度候。

問。乳母を取るにつき、其の善惡を辨別するには、何如いたすべく候や、先づ伺ひたく候。

答。先づ、乳母を撰むについては、一と通り、其人物の善惡を考ふるとは勿論にて、申すまでもなきことに候が、扨て、乳母としての適不適を鑑定いたすには、色々の心得方あり、

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

第一　第二　第三

大略を左に申し述ぶべし。

第一、其婦人の親族間に、何か惡しき病あるものはあるまじきや、之より延ひて、其婦人にも惡しき血すじなどあらんかと、掛念するところなり。

第二、其婦人當人は、身躰丈夫なりや、特に胃病癆瘵などは之れなきや、尤も吟味すべきものなり、且つ、其人の首のまわりに、腫れなどは見へざるが、皮膚に惡しき跡はなきか、胸はひろく、乳粒は十分大ひなりや、此等も共に考ふべきところなり。

第三、其の乳汁は宜しきや、否や、尤も之を吟味するには、其乳汁を少し取りて、ガラスに入れて見るべし、若し液うす

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

第四

く、白鳶色にて、味ひ甘く、且つ、暫時之を放置して上に上ハ
乳多く出來る如きは、乳汁の質の尤もよろしきものと知
るべし。
第四。乳母となるべきものゝ赤子、もしあらば、其赤子と當
方の子との年配同じ程なるを要す。
此は、尤も注意すべきことなり、前にも申せし如く、母親
の乳は、其子に取りて、色々都合よろしきように出來て
居るものなれば、赤子の生ひ立ちと同樣に、母親の乳汁
にも相應の變化あるべきよう備ハり居るなり、例へ
ば、極めて幼なき時には、母親の乳も、亦た其比ろ之に適
するよう、余り濃からぬものなるが、其後赤子の生ひ立

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

ち行きて、段々成分よき乳を要するに準じ、母親の乳も、亦たそのように變り行くものなり、造化の妙工不思儀と云ふも愚かなるべし、然るに、今ま、乳母を擇まんとして、例へば、八ヶ月前に子を生みたる婦人を雇はんに、當方の子、もし一二ヶ月の生ひ立ちならば、卽ハち、此后半年も立ちて先きに飮ますべきほどのものを、此時に飮ますする制にて、甚だ順序を誤まりたるのみか、譬へば、齒の出來ぬ子供に、牛肉を食べさする如く、其品は、何如に滋養ありとも、腹中に入りては、反つて害を起すものとなるべし、故に、乳母は、當方の母親と大抵同じ比に子を產したる婦人にてあるべきを、規則とするなり。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

第五

第六

第七

第八

第。五。其婦人は、メグリありや否や、若し有之ば、乳母と爲すに不適當なり、凡そ、二三度目の子持女には、此事少しは恕すべきなれども、初めての子持女などには、此際、メグリありと云ふと、眞に乳母となすべからざる大切の指し示めしと心得べし。

第。六。其婦人の子供は、達者なりや否や、生れて後ち何如生ひ立つや、之も考ふべきとなり、即ち、其女の乳の効驗などを知るに、尤も都合よき試驗紙と云ふべし。

第。七。年配は、大抵二十五歳位なるを最良とす、之に準じて年格好を考ふべし。

第。八。乳母の乳粒と、赤子の口と、能く適するところあるを

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

母親乳母の食物の事

要す、若し、赤子の口に應じて餘りに大ひなるか、又は、其の恰好程よからざるときは、不都合なるべし、但し、此の適不適を考ふるには、乳粒を赤子の口に入れて吸はせ、直ちに之を離ちて、其の口中を見るべし、若し十分に多く乳を含み居らば、即ハち、吸ひ心地の惡しからざるものと知り得べきなり。

問。母親又は乳母の食物は、何如なるものを用ゆべきや、次に伺がひたく候。

答。さよう、母にても、乳母にても餘程腹がすいて、消化の早きものゆへ、乳を飲ます間だは、何物を食べても宜ろしと云ふ俗説もあれども、之は誤まりたるとなり、矢張り、成

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

るべく滋養多きものを撰みて、用ゆべし、特に、乳を飲まするものが、時々酒を飲みて、精力をつくると云ふものあれども、之も亦た大ひなる過ちなり、酒類の氣は、乳に混じて、子供の躰内に行きわたり、自然その害を幼なきうちより全身へ行きわたらするのみか、之よりして、子供を大酒のみとするの基ひを爲すものなり、故に、このようの事は、尤も注意して禁ずべきとなり。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

第五徵候の事

第六徵候の事

○女子生理（第五回）

第二章 懷姙の事（其三）

扨てまた、第五の徵候は、胎兒の震ひ動ひたるのちの事にて、即ち、腹の大きさ目に見ゆる樣になり、且つ、之を壓して見るに、硬きを覺ゆるに至りたる心地のする事あり、但し、腹の邊り肥えて、脂肪づきたる時は、自然大きくなり、又やゝ硬くもなるものなるが、之を懷姙したる時の樣に比ぶれば、大なる相違あるべし、蓋し、肥えたる故に由るときは叩き見るに、自づから軟かなるよう覺ゆべきなり。

第六は、臍の事なり、最初一二ヶ月は、臍のあと、常よりは下に落入りて見ゆるものなるが、此れより後ち、追々と月の

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

立つに隨がひ、臍やうやく上に反へり、遂には、腹の皮と同じ程の高さとなるべし、若し如此く變ハり行かば、即ハち、亦た懷姙したりと云ふ一つの證據となるなり。

第七徴候の事

第七は、身躰の瘦せるとなり、中にも、顏又は鼻の如きは、殊に目立ちて見ゆべし、尤も、顏は、懷姙后一二ヶ月の所ろ、甚しく瘦せて、其後追々と元にかへるものなり、凡そ此の瘦せると云へる一事にて、直ちに懷姙を定めがたきと勿論なれども、其外いろ〳〵の徴候に合はせて、此の變化もあらば、即ハち、又た一ッのシルシとはなるなり。

第八徴候の事

第八は、膀胱の焮衝と云へるとにて、下腹が少こし痛むとあり、隨かつて、毎々便所へ參りたき心地して、夜中度々起

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

此外の徴候の事

き出づるともあれども、左りとて、思ふよふに通ぜざるものなり、此のようの心持も、亦た懷姙の一つの徴候なるが、之は、甚だ不愉快なるとなり、但し、別段治療すべきほどの事もあらざれば、暫らく辛棒するの外なし。

尤も、餘り不快にして、之を直ほしたしとも考ふる人あらば、毎夜、床に入る前に、甘硝石精（Sweet Spirit of hitre）を、小さき匕に、一杯づゝ飲むべし、或は、麥湯三合に、最良のアラビアゴム七匁半を混ぜて、能く煮立て、之に砂糖などを加へ置き、亦た毎夜眠る前に飲みても宜ろしかるべし。

此外、眠氣の連りに起る事、胸のやける事、ツバの多く出る

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

事、齒の痛む事、食慾の減ずる事、心の激し易き事、皮膚に硫黄のあとの如き斑を現ずる事、食物に好き嫌らひを生ずる事、など何れも皆な懐姙したるのちに起るべき諸々の徵候なり、但し、此類の事は、外の原因よりして來るともあれば、強ち、その一二を以て直ちに懐姙のシルシなりと判別するとは難からんとも、其外の數多の徵候と合せ考がへて決せバ、誤まりなかるべし。

右に云へる事の中、ツバの多く出ると云へるは、時として、數日間つゞくもあり、又た數週間引つゞひて出るもあり。又た、食慾の減ずるは、眞に驚くべきほどにて、或は、食事の時刻の來るとを嫌らふものもあるに至るほど

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

懷姙の徵候に注意すべき事

なり。食物の好き嫌らひは、姙婦に免かれがたきものなれども、餘り宜しからぬものを、好みて暴食などしては、相成らず、能く醫師に相談すべし。

以上、懷姙の徵候に就て、大略申し述べたるが、此の事は、婦人たるものゝ、能く〳〵心得置べきとなり元來、介弱はき質の方は、懷姙后何となくブラ〳〵して、病ひがちの事多し、此時、醫師の診察を乞ひても平生の躰の工合を述ぶると精はしからざるより、名醫も甚だ斷定に苦しみ、實際は、お目出度事の有らんとするとなるに、頓と之に氣附かずして、藥を盛るなどの奇談もあり、又た、自身すでに姙娠の身なるとを辨ぜずして、里家へ歸へり、或は、初めより之を

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

良人に告げずして、大ひなる嫌疑を蒙むることもあり、必竟は、皆な懐姙の徴候を知らざるゆへと云ふの外なし。故に、平生細かに自身の様子に注意し、若し茲に申述べたる如き徴候に似たることあらば、一々之を醫師に告げて、其の判斷を乞ふべし、何如なる名醫なりとも、様躰を精はしく聞かざれば、診斷の誤まることあらんは、勿論の事にてあるべし、然るに、元より、此々か懐姙の徴候なりと云ふことを心得置かざれば、自ら注意するの念も薄きもののゆへ、扨ては、斯く徴候の條々を説明したり。

之れ迄は、先づ、懐姙の有無未だ分らざるときの心得なれども、今までは、既に判然と相分りたるものと見做し、之れよ

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

姙婦の衣服の事

り、姙婦の心得方を說くべし。
第一、姙婦は、其腹の大いなるを愧かしきとのように思ひ、成るべく帶を固くし、着物を小さくし、身を窮屈にして、人の目をくらまさんとするものあり、大ひなる誤まりと云ふべし、既に人世に生れ出づべき一人の子を作りたりと云ふ、眞に名譽なる儀ゆへ、何も、人に恥づべき所なし、決して、隱くし心地などして、身を窮屈にしてハ相成らず、帶も緩くし、着物も、廣ろくし、成るべく躰を自由にして、安らかに暮らすべし。

運動の事

次に運動の事、之は、餘り多くしても宜しからず、左らバとて、又餘り少くしては、尙は宜しからず、餘程注意して、之を

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

適宜にし、躰を丈夫にすると大切なり。

空氣の通よひの事

室内の空氣の通ひを好くすること緊要なり、之は尋常の人にも欠くべからざる心得なれども、姙婦は、特に注意し、平生新鮮の空氣自由に出入するところに住居すべし。

密室に香を燒く事

附て言ふべきは、我國などにて、室内に香を燒くものあり、之は至つて愚なるものなり、何故と云ふに、鼻は天然の番兵にて、身躰の爲め至つて大ひなる働らきをするものなり、例へば、室内に何か惡しき氣あるときは、直ちに惡しき香ひを嗅ぎつけて、早速に之れを頭腦に注進し、早くことの用心せよと云ふものなり、左れば、鼻の力にて、室内の惡氣を感じ、扨て、窓をも開け部屋をも掃除

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

するなり、衛生上莫大の効能を爲す基ひとなるべし、然るに、今ま、香を燒ひて、常も部屋の内を香はせ、例令ひ惡氣の惡むべきものありても、鼻にマヒナヒを遣ひて、其力を迷はし置くゆへ、頭腦も注進の至らざるに安んじて、其儘に閉ぢ込めたる室内に、躰を置かするなり、眞に不養生の事にあらずや、左れば、唐人が、戸を閉ぢ香を燒きて讀書するなど云ふは、甚はだ風流に聞へて、實は尤も愚らしき行ひなりしと承知すべし。

右空氣の流通を好くするとは、出産の后ちまでにも關係するところあり、即ち、斯くつね〳〵清よき氣を吸ふて暮らしたるものは、分娩后に、蓐熱と云ふ産后の重病にか

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

ゝる患はなはだ少しと云ふ。

姙婦は、最初は、餘まり滋養多き强き食料を取るべからず、その頃は、大抵熱氣多く又焮衝を起し易きものゆへ、總じて此のようの食料は、宜しからぬものなり。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

薪と人の氣象との事

○家内理學　（第三回）

第二章　温熱と生物との關係の事（下）

薪は、温熱を出す爲めの木材なるが、此の薪の多くあると少きとに由りて、人民の氣象に、多少の關係を及ぼすと云ふとあり、即ち、薪の少き場所は、大抵家屋小さく、家内の者相ひ群りて住居し、外の風を成るべく容れざるよう戸を閉づるなどの事あるより、自然、人民の躰小さく、氣象不活潑となるべし、例へば、ラプランドと云ふ所の人民は、其の小さき家の内に、腐れたる油を燃やし、漸く温氣を取りて、長き冬を過すと云ふ、眼うるみて自ら活き〳〵とせざるは、之が爲めなるが如し、必竟、此の薪の有無によりて、民の氣

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

温熱と國語との事

象に變ハりを及ぼすと、即ハち、温熱と生物との關係と云ふべきなり。

又た、温熱の多少に由りて、一國の言語に關係を及ぼすとあり、或る學者が之を論じたる言葉に、凡そ、寒國の人は、自然口を開くとを懶うく思ひて、小口の儘に談話するより、語の音に、子音(シキヒ等其外總て母音ならざるもの)多く、耳に聞きてヒビキ多し、然るに暖地の民は快活に口を開いて、自由に談話するより、語の音にハ、自然母音(アイウエオ)多く、聞くに甚ハだ温やかなるを覺ゆと云へり、眞に面白き説なるべし。

人工を以て温熱

自然に存する温熱の多少によりて、人間の上に關係を及

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

を用ゆる事

ぼすと、如此く莫大なり、人間は、斯くも數多の支配を外部より受けて、其有樣に隨ひ變化しもて行くと、實に心外の至とも見ゆべし、然るに、之は、たゞ外部より受くる所の次第を、有の儘に述べたるものに止る、之に反して、人間が、其心を以て、外部を制すると、亦實に非常のものなり、假令ひ、天然には、薪も少く、炭も不足なりとも、遠方より石炭を取り來りて、之を家內に燃やすと難からず、又た假令ひ氣候は元來寒冷なりとも、若し家に數多の炭を燒いて、溫むれば、則ち人造の溫熱を得べし、故に、人は能く其力を以て、外部の支配を制するものなり、左れば、人間が溫熱を造り溫熱を用ゆる等の手術の巧拙を以て、一國の文明の高し低

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

温熱に由りて物の大きくなる事

しを測るものあるなり。

第三章　温熱を測る事

凡そ、物は温熱を受け入るゝに隨がひて、或は其容を大くし、或は其容を小さくするものなり、但し、温たまりて容の大きくなるは、普通の事なり、故に夏となれば、尺度も伸ると云ふ、下げ振りも長くなると云ふ、況して色々の品物は、之を煮れば、大抵は、大きくなる、之れ則はち、温熱を受け入れて、容の増したるものなり、然るに、氷に至つては、全く之に反す、氷は、華氏の寒暖計にて三十二度の時に出來るものなるが、之よりも六度餘温たかくなりて、三十八度八分の時を以て、水の容の尤も小さき時と爲す也、即ち、三十

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

右の一事に由りて温熱を測る事

二度の水は、温熱を受入れたる爲めに稍や容を減じたると均し、但し、之は氷にのみ限るとなれバ大抵の物は、熱を受るに隨がひ、容を大きくすると云ひて、差支へなかるまじきなり。

扨て、温熱を受入れて容を大きくするとは、大抵の物みな然るところ、中にも、木、石、鐵の如きは、人の目に見て左程とも感ぜざるが、水、アルコール、水銀の如きは、之が爲に、容を増すと明らかに知らるゝなり、左れば、温熱を取去られたるが爲めに容を減ずるの模ようも、亦た甚はだ明らかに見らるゝの便あり、故に、之を用ひて温熱の多少増減を測るとを得べし。

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

世に云ふ所の寒暖計なるものハ、即ち、此の理由に隨つて造りたるもの也、先づ、ガラスの管と、下に着いたる球とに、水銀を入れ、管の上の方、即はち、水銀の入つて在らざる部分は、空氣を抜き出して、眞の空となし、頂の口を封じ、扨て、下の球を氷の中へ浸し置けバ、水銀或る所まで下り來るべし、此の下りたる場所へ、點を記るし、之を氷點と名づく、即ハち、三十二度に當るものにて、水が氷と爲るべき程の冷やかさを云ふなり、既に斯くして氷點を知らば、次には、之を沸立ちたる湯の中へ入れ、水銀の登るべき場所を認め、其點を記るすべし、之を沸騰點と名づく、即はち、二百十二度にて、湯の沸立つたる温かさを云ふなり、斯くして、氷

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

點と沸騰點とを上下に定め、其間を百八十の目に盛りて、小さき度を割り付け、以て寒暖の度を測るとなす。但し、氷點は何故に三十二度と云ふかと問ふに、之は、雪に鹽を混ぜて、極めて冷やかなるものを作り、此の中へ、前に述べたる水銀の管を挿し入れて見るに、右に述べたる氷點の所よりは、遙か下の方まで下がるとなり、故に、此の極々の下の點を零點と見て、之より上へ三十二度を盛りて、之を氷點と爲し、氷點より更に百八十度を盛りて、沸騰點と爲したり、沸騰點を二百十二度と云ふも、亦た之に由るなり、而して、此の通常の寒暖計を、華氏云々と云ふは、元來フハーレンヘート(華氏)と云へる人

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

家内に寒暖計を用意すべき事

が工夫して作りたるに由る。

寒暖の人身に關係あることは、前にも色々と說明したり、故に、何處の家にても、必らず一つ宛の寒暖計を備へ置いて、平生よく寒暖のもようを測り、以て、一身を保護するの用意を爲すと緊要なり、故に、衞生に注意するものは、家内に、一日にても、寒暖計なくては適はざるべし。

諸事物の温度の事

然れば、細君たるものは、能く寒暖計の上り下りに注意して、戶の開け立てより、衣物の厚さ薄さに迄で、心づくべし、故に、今ま、左に、華氏の何度はどにて、何如ようの次第あるべきやと云へるとに付き、實際心得となるべき出來事の若干を示し、以て、其注意を要すべきものゝ一例と爲さん。

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

室内にて尤も程好き温度は	六十五度より六十八度
人身の尤も冷やかなる時	六七
人身の尤も温たかなる時	一一〇
血温即ハちの血の温度	九八
牛肉の脂の溶くる時	一〇〇
羊肉の脂の溶くる時	一〇六
浴湯の温度	一一〇より一三〇
通常飲用の茶コッヒー	一三〇より一四〇
牛酪の溶くる時	一三〇より一四〇
蠟の溶くる時	一五五
牛乳の煮ゆる時	一九九

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

白砂糖の溶くる時	三二〇度
通常の火の温かさ	一〇〇〇
酒の氷るとき	二〇
血の氷るとき	二五
乳の氷るとき	三〇
水の氷るとき	三二
家蠶かへる時	七七

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

食卓上の禮に注意すべき事

○西洋女禮（第五回）

第十章　食卓上の心得の事（上）

食卓上の禮儀ハ、西洋諸國に於て、特に重んずる所ろなり、凡そ彼の國にては、食事の間だを甚だ樂しき時間となし、此折には、成るべく面白き談しを爲て、互ひに喜こび合ふと致せば、惣じて、不快の念を起さするごとき事は、一切嚴禁せり、食事に關する禮儀の甚だ重やかなるは、即ハち、互ひに樂しみ合ふ愉快をば、少しにても滅ぜざらんと欲するが故と知るべし。然るに我國にては、元來食事の際に物言ふとを禁じ、何事もたゞ嚴密に制御して、反つて窮屈に思ハするの趣きあり、下つて、吾々が平生家內に於て

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

食事するときも、諸與に、此時間を尤も樂しみある時となさんとの覺悟足らざるが故よ、亂暴不行儀至らざるなく、甚だしきは、食事の最中に、何か心配らしき事をも談じ、或るひは、下がかりたる醜談をも話しあふとあり、西洋の習慣に比らべて、非常の相違あるものと云ふべし。左れば、西洋料理の食卓上に於ても、之と同樣の事に心得、頓とその儀式に注意せざるものあり、外國人に對して、尤もはづかしきとと思へる、中にも、婦人方は、禮儀の事を餘程八釜しく申すものなれば、之れより追々西洋婦人との交際も盛んになり、或るひは、西洋流の宴會も毎々所々に有之ときに際し、右食卓上の禮式は、是非とも精かに心得置かざれ

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

ば相成らざるなり。

招待の返辭の事

會食へ招かれたるときは、成るべく速かに諾否を返辭すべし、且つ一度び之を受けたるときは、復た違約するを許さず。

斷はりの事

何か差支へありて、參りがたきときは、前約有之參會いたしがたくと申すが、通例なれども、之は必ずしも宜しき法にはあらず。

時刻に參る事

時刻を固く守り、必らず、定刻に參會すべし、或る禮式家の言葉に、若し早すぎたらば、道路をあちこちとして、暫らく猶豫すべし、若しも餘りに遲延したらば、寧ろ入席せずして、其事由を報じ、斷はりを呈すへしと、之れ必らず

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

しも通常の致し方にハあらざれども、時刻に後れて食事すでに始まりたるのちに來らバ、客と主人とを迷惑さすると莫大ならんと深く心配するは、成るべくハ此れ程にも有りたきとなり。

着席及婦人同伴の事

客悉く集まりたるとき、主人又は主人の細君は、來客中の紳士に、同伴すべき貴婦人一人づゝを指し示し、且つ其着席すべき場所を知らせ、順に隨がつて席に着かすべし、之は、主人等が能く注意して爲さゞれば、大ひに混雜を引起すべし。

着席順序の事

着席の順序を定むるには、位階年配などに注意すべし、其外、男子の珍客は、主人の妻之を伴ひ、婦人の珍客は主人

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

食場へ入る心得の事

之を伴ひ、上席に着くべし、尚は婚姻したる婦人は、未嫁の娘よりも上に着くべし、年上の人は、固より年少の人よりも上座たるべし。

偖て、着席の順序も定まり、食物の用意もすでに調ひたりとの知らせあらバ、主人は、先づ其伴ふべき婦人を腕に倚らせて、場に入るべし、來客は兼ねて指し示されたる順序に隨がひ、且つ其の伴ふべき婦人を伴なつて、之に引つゞき入場すべし、斯て最后に至り、主人の妻は、かの紳士を伴なつて入場するの定めなれども、此は、少しく舊法に屬して、不都合なるところあり、矢張り、夫が第一番に入りたるとき、之に續ひて參り、扨て來客を其席に

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

食卓の大さの事

案內する方、反つて便利ならんと思はる。

食卓ハ、來客の數に應じて備ふべし、客少くして、机餘まり大ひならば、談話の勢ひ拔けて面白からじ、又た机餘まり狹まくして、來客特の外群集しては不便利多し、故に、一人につき大抵二英尺の割を以て席を設くべく、尚は、來客ハ男女の數殆んど半ばするように用意すべし。

來客を割り振る事

來客を甘まく割り振りて、其席を都合よくすると、一つの心得なり、例へば、平生滑稽に長じ、談しの餘程面白き人あらんには、之を成るべく中央の席に案內すべし、但し、かゝる面白き人二人以上あらば、此の二人を、成るべく遠けて、左右へ分ち置くと大切なり、否らざれば、兩人餘

五〇

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

食場所の上下の事

まりに能辨を振るひ合ひて、反つて面白からざる趣あらん、亦た同職業の人を二人並らぶるは宜しからず、斯て、其ハなし餘まり道に入つて、余人の樂しまざる如きとをも語り合ふに至るべし。

食卓に於ては、主人の細君上席に就き、其の伴なひたる紳士は、右細君の右側に着き、此の紳士に次ぐべき程の紳士、かの細君の左側に着き、之よりして男女かわる〴〵列座すべし、又た末席には、家の主人着席し、其の伴なひたる婦人は、右主人の右側に着き、此の婦人に次ぐべき程の紳士、かの主人の左側に着き、之よりして亦た男女かはる〴〵列席すべし。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

着席后第一の心得の事

總躰着席せば、皆な手袋を脱きべし、斯て女主人公先づナプキン(手巾)を取りて、膝に載せ、此のナプキンの内に置かれたらん麵包を、左の方に置くべし、諸客すなはち之に倣ふ。

最初に出す食品の事

第一番には、スウプを出すと勿論たり、之には、色々の議論あり、最初、先づ魚と共に之を出すべしと云ふもあり、又來客に其好みを問ふべしと云ふ說もあれども、共に行れがたし、矢張り、尋常の如く、スウプを出すを禮とすべし。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

埃及の舊國たる事

ナイル河が埃及を利する事

○萬國史畧（第四回）

第六章　埃及

世界に出で來たる國に於て、最初に、政府政治の組立を備へたるは、即ち、埃及なり、蓋し、埃及よりも尚は舊るき國ありしならんとは想像せらるれども、現に歴史に殘りて明らかなる證據の存するは、埃及よりも舊るきはあらず、彼のチャルジアの如き、亦た天笠即ち印度の如き、共に非常の舊國なれども、之を埃及に較ぶるときは、尚は新らしきが如し、左れば、万國歴史の上に於ては、埃及を以て、最も舊るき建國の土地とはなすなり。

前章に說明したる如く、凡そ最初に出來る國は、大抵漂流

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

地の近邊に於て起るものあるが、此の埃及の如きも、即ハち、亦た此の理に相應し、彼のナイルと云へる、大河の傍らに於て、初めて出現したり、故に、昔しより、埃及を名けて、一に、ナイル河の賜ものとも稱したり、即ち、全く此河の德により成立つもの甚ハだ多きがゆへあり、蓋し、ナイル河は、其源を、アビシニヤの山々より發し、赤道アフリカの大湖水を合ハせて、埃及に流れ來るものあるが、年々アビシニアの山に大雨あるとき、河水大に溢れて、泥土を河邊の土地一面に押し流がすあり、埃及の地たる、元來砂漠に取まかれて、豐饒の地味ある所にハあらざれども、只だ此の泥土を被むるによりて、年々地力を增し、則ち作物も能く

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

出來ると云へり。

埃及の產物の事

埃及には、椰子の類澤山にて、人民その果實を食らひ、容易に生計を辨ずるのみか、穀物も僅かの勞力にて出來得るより、農產豐にして、何れの藏も常に充滿するの風ありしとぞ、左れば、總べて地中海の近邊に住まへる國民にして、食料に欠乏を告ぐる節は、常に埃及に來りて之を求めたりと云ふ。

埃及の生計向容易なりし事

生計の品物斯の如く多かりければ、人民も暮らし向容易にして隨がつて、特の外多く蕃殖したり、サイキウラスと云へる人が、此頃の事を記錄したる書物に據りて見るに、埃及にて、一人の子供を壯年迄に育て上ぐるには、僅かに

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

今の金四弗の入費を以て十分なりしと云へり、埃及國民の數の急かに增加したる、必竟如此く生計の容易かりしに由るものならん。

埃及の事蹟を知る事

埃及の事を研窮するには、元と希臘にて作りたる歷史に據つて、漸く之を辨知するとなりき、殊に其中にも、ヘロドタスとて、歷史家の父とも云はるゝ希臘の學者が記るし置たる著書に據りて之を尋ね、其外は、埃及の一僧マンエソーと云へるが、紀元前三百年の頃ろ、希臘文にて埃及の歷史を記し置きたる殘篇に據りて索むるのみ、其餘に、此の舊國の事を明らかに承知すべき便あらざりしと也。

聖字發見の事

然るに、近世に至りて、埃及の事を研窮するに、別に一つの

（三五）

方便を得たり蓋は、埃及人が其の建築物石碑墓石の類に刻み置きたる文學の今に殘るものあるより、之に據つて、當今の事を推し察するとあり、然るに此の文字の讀み方は、埃及の滅亡したると共に消え行きて、誰れも之を辨ずべきものあらざりしかバ、希臘語にて右の文字をフヒーログリフヒック、即ハち神聖刻字若くは聖字と稱して、只だ之を一つの奇觀の如く見做し去りて居りたるとあり、然るに、千八百年代の末つ方、佛軍ナポレヲンに從つて埃及に遠征したる折、一人の工夫が、ナイル河の口セッタ河口にて、竪三英尺程の石碑一面を掘り取りたるが、其面てに、三種の異樣の文字にて、何か書き付けたるを見たり、之

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

れ即ハち世に有名なるロセッタ石とて、後にかの聖字を世に明らかにしたる字典となりたる也、扨ても、右三種の文字を細かに吟味するに、下の方に刻みたるは、即ハち、希臘語なりき、上の方に彫り付けたるは、即ハち、かの聖字と云へるものなりき、中の部分に刻したるは即ハち俗語と譯し、後に「デモチック、カラクター」と云ひたるものなりき、依つて、此の文字を寫し、之を當世の學者社會に流布して、其の反譯を促がしたる處ろ、右三種の中ち、希臘語は固よりすでに世間に明らかなりしかバ、之れを種として字々、句々を推譯し、遂に、聖字のイロハと云ふべきものを發見したりしかバ、之れよりは、此のイロハに據つて、所々 五八

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

(七三)

埃及人民人種の事

に存する埃及の碑銘を譯讀し、之より推して、以て埃及當世の景況を辨ずるに至りたり、左れば、ロセッタ石の發見と、聖字の意義の明らかとなれりしより此の方、埃及の事を研窮するに、更らに一つの大なる助けを得たりしものと知るべし。

埃及人民の人種何如にと考がうるに、世間にては、往々之を亞弗利加人種なりし如く言ひ做す人もあれども、其實矢張りカウカシアン人種なりしと明白なりとす、但し彼のアリアン人種又はセム人種と云ふものと同一ならざるより、學者中、埃及人種を呼んで、特に、ハム人種又はカマイト即ち黑土人種など申したり、民の氣象は、アジア人

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

惣躰の通情と異り、寧ろチャルデアの人民と大に背る所 六〇
ありて、建築の事を好むの念、甚だ厚かりきなり。
カウカシアン人種を分ちて三つとす、其一、アリアン人
種とは希臘、ラテン、印度、ペルシア・等の人民を含む、其二、
セム人種とは、シリア、荒比亜、ヒブリウ等の人民を含む、
其三、ハム人種とは即ち、埃及の人種を云へり。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

○文學一斑本回の分正誤

一頁二行　自から(おのづ)のずはづ

二頁五行　已が(をの)のをはお

三頁六行　延は𛂈

四頁三行　ゐは𛂈ヱはイ

七頁一行　◐は○

九頁三行細注　思ひこがるゝ老いゆく等に思ひこがるゝ又た老いゆくとヒコ、イユの右傍に。もの印わり

九頁四行細注　どとしすのすは誤入

九頁十行　これなりの下、は。

十頁一行　すくしゝき一格以上とわるは「くしき、すくしゝき第二音より轉(うつ)る格以上」の誤

十頁八行　えうけうはえう、けう

●女學雜誌社新書發兌

つれ〴〵草講義第一　定價十二錢　郵稅四錢

右は鈴木弘恭君が下田歌子の和文教科書を諸の女學校に於て講釋ありたる解明しを社員が筆記したる者なり元と教科書第一卷の講釋なれば斯く題しぬ

右第一卷出版の後ち諸大家より左の評を寄せられぬ

○小中村清矩君云く(上略)昔より注さくの書ともこれかれあれど或は事足らず又はくはしきに過たればいかで大かたをつゞまやかに解き得たる事ともあればやと常に思ひたりしに此講義を見れば一段ことに先づ文詞をときあかし扨て大むねを取りすへて常のたゞ言もてたれも〳〵心得やすきさまにさとされ又折には文つくるらん法則ともなりぬべき言をさへ交じへられたれば面り其とき言を聞くこゝちして學びの山口わけゝめん女わらべには栞ともいふべくこよなきたま物ならんかし(下略)

○内藤耻叟君云く徒然草の抄拜見仕候殊度御手練の程感歎仕候此項女子もいかめしき文躰を書き候へ共女子の文章ハ大抵徒然草などの躰裁に致度事と存候漢文めきたるは不相應の樣にも相覺候只管に男勝りなるが女子の本意とも不被存候依ては此御抄など尤も作文の軌範と相成可申候(下略)

○黒川眞頼君云く(上略)このはじめのほど十八段ばかりすり卷になれるをすこしいとまありければ取いでて見る〳〵「我やとのむつましき人となるものはつれ〴〵といふふみにこそありける」手はなちがたくて日のくるゝまでに見をへつ

○久米幹文君云く徒然草は(中略)諸の學校の教科書に用るなれど先は大ようにのみ見すぐしてまめやかに心得たる人はまれなるべしさるを鈴木大人のこの講義いとつゞまやかに文段句法のきだ〳〵ことばの心はへをもとき明されたるは世にある注釋どもにまさりてめでたし初學の人この書をよくよみたらんには古今の文法をさとり得て其かきいでん文も又めでたからんかし

婚姻論　全一册(横山雅男君著)　定價三十五錢　郵稅十四錢

○朝野新聞評(略)之を古今萬國の記錄に徵し既往現在の實例を援き論說餘す所なし近來女權論の盛んなるに連れ婚姻の一事も人心に

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

遞信省認可

浮み出る所となり新聞雜誌等ゟ之を論ずる事少からざれど未だ本書の明晰詳確なるに及ぶものなしとの世評あるハ過ぎたりと云ふべからず云々

○毎日新聞評(略)書中述る所徒に空理に依らずして統計の事實に依り學理に徴して婚姻の標準を示す等は著者の最も苦心したる所ならん云々

○やまと新聞評(略)苟も文明社會に周旋する者の一讀を要すべきは敢て喋々する迄もなし予輩が此書を稱賛する點は議論の歐米直輸入に非ずして亦能和漢古今來の慣例をも取調へ亦統計法に依て今日の實況をも究めだるにあり云々

○教育時論評(略)毎篇の論理は精密なる各國の統計と禮法とに基きたるもの、如き有益の論著なり

○めざまし新聞評(略)何々等を論じたるゟのにて發行所へ例の停止後評判の好き女學雜誌社なり

○日本の女學評(略)今ま此論の本邦に產したるは必竟文明の媒妁に由る者として吾人は慶賀すべき也

木村鐙子小傳　一册(巖本善治編)

右は編者が明治女學校生徒の爲に編著し且つ友人知己の間に配布したる者なれども尙ほ殘部有之に付一册十錢郵税六錢を送らるゝ者には呈送すべし

文法口授　一名和文獨り案内　(鈴木弘恭君著)　價十八錢 郵税四錢

右は學校敎科用の書籍に適當なりとて既に成立學舍女子部頌榮女學校長栄女塾明治女學校等の敎科書と爲る

東髪内獨案　渡邊鼎君著(細圖入)　定價十五錢 郵税四錢

東京々橋區日吉町八番地　女學雜誌社

女學雜誌第七十七號目録

●社説　女學校の論(第二)●論説　婦女權理の沿革第一(穗積陳重君述)○婦人の職業第二(平岩愃保君述)●叢話　和文學講義(鈴木弘恭君述)○看病の心得●佳傳　女丈夫の傳●寄書　文のかき方(大橋景足)○倫敦タイムス新聞の女服論(高根虎松譯)●新報　十六件●特別廣告　婦人矯風會録事●廣告

女學雜誌第七十八號目録

●社説　女學校の論(第三)●論説　細君に告ぐ○婦女權理の沿革第二(穗積陳重君)●叢話　避暑の家づと(小中村淸矩君)○秋夜の怪談○乳母を選ぶ一の注意○密室香を燒く事●批評　杉山藤二郎氏女權美談文明の花○藤尾録郎氏著家計簿記法例題○依田孝氏著一夫一婦論●佳傳　女丈夫の傳●寄書　夫人の未來(中川永輝)●新報十七件●特別廣告●廣告

東京京橋區日吉町八番地
發行所　女學雜誌社
持主兼編輯　巖本善治
印刷　森田豐

東京秀英舍印行

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY